

アリストテレスのニコマコス倫理学における幸福のあり方の正当性について

経済学部 2 年

山本彩華

2019/08/09

普段自分が幸福だと感じる瞬間はどのようなときか。そう考えると、「自分は今この瞬間に絶大な幸せを感じている」という感覚になることはあまりないように思われる。そもそも幸福は、何か出来事の生じたときに「感じる」ものなのか、出来事と自身の感情を包括的に俯瞰して「理解」するものなのか、あるいは人生全体を「幸福な生き方をした」と収束させるのかははっきりしていない。つまり、幸福は感情なのか理性で理解し得るものなのか、議論が必要だと言える。自分の周りの人たちを見ていると、楽しい経験をしたときには幸せと言い、つらい思いをした場合には自分は不幸だと言う。そのような状況を見る限り、その場の感情で幸福かどうかを決めてしまうのはあまりにも単純で浅はかなのではないかと思う。私の場合は、自分の意志を貫き、理にかなった行動ができたときこそ自分に満足することができ、幸福を感じられると思う。たとえ身体的または精神的につらい状況があったとしても、行き着くところが納得のできる結果であればそれが幸福なのではないだろうか。

以上について考えるため、私は哲学的な幸福論にはどのようなものがあるのかを調べた。ラッセルやヒルティ、ショーペンハウエルなど有名な理論も多くある中見つけたのがアリストテレスのニコマコス倫理学だった。アリストテレスが観想的な活動に意義を見いだしたということに、自分の考えと重なる部分があるのではないかと思い、研究題材にすることにした。アリストテレスの理論が、幸福のあり方に対しての私の考えまたは疑問を呈している点について解決するかを考察すると共に、万人に当てはまる幸福の定義は存在するのか、するならばどのように規定できるのか考案したいと思う。ここで、私が解き明かしたい幸福のあり方に対する疑問点とは、・幸福は感情的なものなのか ・観想的生活には感情は要らないのか ・人間は感情と理性のバランスをどのように持つべきか などのことである。また、「感情」という側面について、アリストテレスは著書の中で「快楽」という表現を用いている。自分も、「感情≒快楽」のように用いていこうと思う。

まず始めに、「満足な豚より不満足な人間の方が良く、満足な愚か者より不満足なソクラテスの方が良い」という、ジョン・スチュアート・ミルの言葉を引用したいと思う。これは、功利主義を提唱したミルが、ベンサムの定義に対して異論を唱えた一文である。功利主義における幸福は、快楽とほぼ同義であり、肉体的・即物的な快楽のことだが、精神的・知性的な効用(理性による行動の結果)から得られるものも幸福としている。ベンサムは、これらは総じて量的に測れると主張したが、ミルはそれらの幸福には質的な違いがあり、目先の欲望を満たすことで満足する動物や愚かな人間より、普遍的真理について考え続ける人間やその代表であるソクラテスの方が、たとえ答えが見つからなかったとしてもよっぽど価値のある優れた幸福であると述べた。ミルとアリストテレスは全く異なる時代・ジャンルの哲学者なのでそのつながりを論じることはできないし、功利主義における幸福のあり方はアリストテレスが考えたものとは異なるが、ミルのこの名言は、アリスト

テレスの考える幸福のあり方の論理の枠組みを端的に表していると思う。

しかし、ミル、つまり功利主義の幸福の定義とアリストテレスの幸福のあり方がどのように異なるかが、私の一つ目の疑問点の解決につながってくる。二者のどこが異なるのかというと、先ほど挙げたように功利主義では「幸福＝快樂」と定義されている一方、アリストテレスは①一般の多くの人々が考える幸福の例として挙げられる快樂、富、名誉は、一人の人間個人の外側の出来事であってその人間に固有なものではなく、②快樂や富や名誉そのものが善であることにはならない、と考えている。ここで、「一般の人」というのは、哲学者や有識者ではない普通程度の教養を持つ人々のことであり、「善」というのはアリストテレスが用いる言葉で、人間が何か行動するときなどに目的・原動力とするもののことである。人生最大究極の目的のことは最高善と呼んでいる。アリストテレスの言葉には、『それこそ善いもの』(＝善)とは何か固有のものであり、当人から引き離しがたいだからである」ともある。つまり、どのような出来事に対してもあるいは人生のどの時期であっても共通の論理に当てはまる目的が、幸福における最高善であるということである。身体的・精神的な快樂に陶醉することも、大金を手にして満足することも、名声を得て優越感に浸ることもすべて一過性のことである。「あらゆる快樂は自然本性へと至る感覚されうる生成過程であり(＝感情によって生成されるので)いかなる生成過程も(善や最高善の)目的とは同じ種類のものではない」というアリストテレスの言葉が表している。快樂は動物として自然に生じる欲望のまま行動することであり、目的は存在しないので、目的を持って行動するという善の行動とは根本的に原理が異なる。よって快樂は幸福の最高善に値するほどの規模では到底なく、一生涯を賭ける目的とは言いがたい。それから、快樂自体が善と異なる性質であるということだけでなく、快樂の性質は善の行動をする過程を妨げる可能性がある。アリストテレスの言葉では、「さまざまな快樂は思慮をはたらかせるにあたって妨げとなり、快樂への喜びが増すほど妨げは大きくなる」という表現がされている。これらのことから、快樂は幸福の善になり得ないので、快樂は幸福とは異なるとアリストテレスは考えたのである。

先ほど「一般の人々」とっては快樂や富や名誉が幸福であると思われていると述べた。このような一般の人々の生活を「享樂的生活」と呼ぶ。人生のゴールが享樂を得ることになっているのである。しかも享樂を目的として生活しているのではなく、自然に得た享樂が幸福の善だと思込んでいるのである。では一方、「善の行動をする人々(＝活動者)」にとっての幸福とはどの状態なのだろうか。彼らがどう考えているかということ、「ある人々にとっては思慮が、ある人々にとっては思慮が、別の人々にとってはある種の知恵が、またある人々にとってはこれらすべて、もしくはこれらのうちのどれかにさらに快樂がともなったもの、あるいは少なくとも快樂を欠いていないもの」が幸福であるとアリストテレスが書いている。享樂的生活と異なり目的を持って思慮を働かせ達成しようとする善の行動は、具体的には知的態度で世界の存在について考え、実利から離れて哲学や学問をすることである。これを「観想的な生活」という。観想的な生活こそが実質的な利益を求めずに生きる態度であるから、活動者の最高善なのだと考えられる。しかし、活動者の幸福な「状態」とは上記のアリストテレスの台詞であるが、「快樂がともなったあるいは快樂を欠いていない」ことが条件であるならば、善の行動だけでなく、自然に得る快樂も、幸福な状態を維持するためには必要だということになる。実際アリストテレスも、「幸福は

外的な善をもあわせて必要としていることは明らかである」「外的善は幸福の前提要件であり、身体的善は本来道具として働きを共に助ける有用なものである」「快樂は活動を完全なものとする」などと述べている。

幸福な「状態」という観点で考えてみる。ある活動者は善を求め欲望に流されずに厳しい生活をしていたとする。その過程が、身体的苦痛ばかりの毎日であったなら、最高善にたどり着いたとき、自分の人生は幸福であったといえるだろうか。活動者の選択した結果なら、本人がよほど精神的に成熟していれば、目的を達成できたことに納得し満足することができるのかもしれない。だが、身体的苦痛を味わうきっかけが自分の善のための行動目的の選択によるものでなく、生まれ育った環境や人に押しつけられた避けがたいものだった場合、自身の選択でない上に逃れることもできないため、納得できないままのことになるだろう。その「状態」は、知的態度で善の行動を試みることができたとしても改善されるものではなく、むしろ善の行動さえ妨げられる可能性もある。それは幸福な状態とは言えない。善の行動ができるような最低限の快樂要素はなくてはならないのである。極端ではいけないという言い方もできる。

アリストテレスの哲学には、「中庸」という考え方も示されている。「中庸」は偏っておらずまたその状態が道徳的・倫理的に好ましいことをいう。アリストテレスは特に、過剰と不足を調整した最適な状態とみている。例えば、「勇氣」は、過剰な「無謀」な性質と不足した「臆病」という性質の中庸の性質で、最適な状態である。他にも、卑屈とおごりの間の自負、鈍感と放埒の間の節制など、人間の性質のいくつかについて、最適な状態＝中庸を設定している。そこで、私は始め、アリストテレスが中間を取ることで良い状態を保てると考えているなら、人々の性質の一部だけでなく、幸福における観想的な生活と享樂生活の割合についても中庸の考え方をうられるのではないかと考えた。しかし、観想的と享樂的、つまり知的態度(＝理性)と感情(＝快樂)のバランスを5:5にしてしまうと、先に挙げたような、快樂が理性を妨げるとか、快樂は観想的な生活の状態に欠けない程度ということに矛盾する。その上、5:5のバランスでは大抵の人間が何も努力をしなくてももたない状態とも言えるため、善の行動の結果の割合とは違うように思われる。そこで、アリストテレスの論理を使いつつ、人間が幸福な状態を保って善の行動をしながら生きていくためには、理性と感情の割合はどのくらいが適切なのかを自分で考えてみることにした。私の感覚では、理性:感情=7:3位の割合が良いのではないかと目処を立てた。言ったように、感情的な面が理性を妨げてはいけないから、当然理性の方が割合が大きくならなければならない。そこで考えたのが、感情というものの自体の性質である。先ほど勇氣や節制という人間の性質について挙げたが、それらは、過剰や不足のときは感情的性質である。それらを矯正して中庸に持って行くことで適切な「感情的性質」に代えることができるのである。矯正するときには、中庸という適切な状態に持って行くという目的を持って、善の行動がされている。つまり、感情を中庸化するときには善の行動が用いられ、理性が働いているのである。よって、私は二段階の中庸化を行うことで、適切な理性と感情のバランスを決めることができると思った。まず始めのように理性:感情=5:5と決める。その後、感情を適切な感情的性質にするためにさらに中庸化を行う。理性:感情(過剰:不足)=5:5(5:5)となるわけである。結果、感情的性質を中庸化するための善の行動に使われた理性の割合を、始めから分けていた理性の割合に参入させると、理性:感情

$=5+2.5 : 2.5=7.5 : 2.5$ となる。この割合を意識することは、アリストテレスの理論により、観想的生活を最高善と考えつつ、幸福な状態を保つために多少の快楽を維持し、感情的性質を中庸化して適切な状態を保つことで幸福を得るための一つの手段である。これが人間の幸福なり得る方法・状態であると結論づける。

参考文献

ニコマコス倫理学 / [アリストテレス著] ; 神崎繁訳 岩波書店 2014/3
NOMADIC WOOD <https://nomadicwood.com/archives/2148> 2019/08/09